

小学生における家庭機能の認識と家庭科教育に関する研究

鈴木昌代* , 三輪聖子**

*富山県立富山西高等学校

**家政学部家政学科家政学専攻

(2002年9月12日受理)

Study on Home Economics Education based on Cognition of Family Function by Elementary School Students

*Toyama Nishi High School, 926 Hayahoshi, Fuchu-machi Nei-gun, Toyama City, Japan (〒939 2706)

**Department of Home Economics, Faculty of Home Economics, Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu City, Japan (〒501 - 2592)

SUZUKI Masayo* and MIWA Satoko**

(Received September 12, 2002)

1. 緒言

現代社会は少子化に歯止めがかからず、1970年代後半の第2次ベビーブームから21年間連続で子ども(15歳未満人口)数が減少している。それとともに親の子どもに対するかかわり方、家族の在り方や子どもの意識、そして学校教育も20年間で大きく変化している。

本研究は、子ども数の減少が始まる1981年、そして現在の2001年、その中間の1991年という10年間隔で家庭生活や家族に関する子どもの調査結果から、子どもの家庭認識や家族のとらえ方や望む家族像についてその変容を明らかにし、学校教育とのかかわり、特に生活に最も密着した教科である家庭科教育との関係性を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象・方法

子どもの調査は、家庭科を学習する前後の

子どもたちの家庭生活に関する認識をより明確にするために、小学校4年生と6年生の児童を対象とした(表1)。家庭科教育は、調査時期に使用されていた学習指導要領と家庭科教科書5・6年生用を用いる。

調査方法は、1982年1月に日本家庭科教育学会が全国規模で実施した調査『現代の子どもたちは家庭生活をどうみているか』と、それを基に作成して1991年7月に富山県の公立小学校6校を選定して行ったアンケート調査、さらに2001年9月に同じく日本家庭科教育学会が全国規模で実施した調査の、過去3回にわたる調査結果の比較検討を行う。さら

表1 調査対象者 (人)

	1981実施		1991実施		2001実施	
	小4	小6	小4	小6	小4	小6
男	938	979	244	305	1301	1325
女	861	892	263	252	1254	1286
計	1799	1871	509	557	2555	2611

に、これらの調査が実施された時期に使用された小学校学習指導要領と家庭科教科書の内容について、その変遷をたどり、合わせて調査結果からカリキュラム内容についての考察を行う。

なお、集計についてはSPSSと集計用ソフト秀吉を用いた。

3. 子どもの見た家庭の働き

(1) 子どもが考える家庭の働き(役割)

「子どもを生き育てる(生命再生産)」「寝

たり休んだりする(生命維持)」「夫婦が一緒にくらす(夫婦円満)」「くらしに必要なものがある(物質的充足)」「くらしに必要なお金がある(金銭的充足)」「子どもをよい人間に育てる(しつけ・教育機能)」「その家の習慣を受け継いでいく(文化継承)」「老人や病人などが守られる(看護・介護)」「家族みんなが楽しく暮らす(精神安定機能)」「近所の人や友だちなどときあう(つき合い)」「その他」の項目から必要と思う働きを複数選択させた。

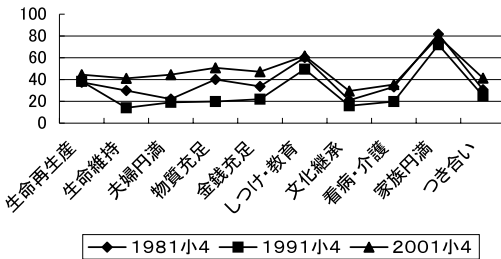


図1 大切な働き(小4全体)

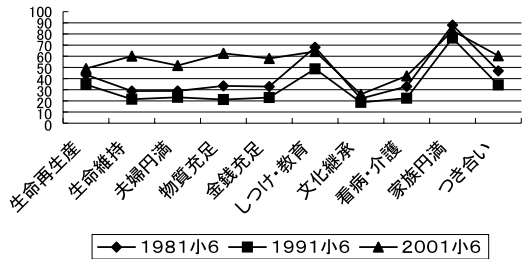


図2 大切な働き(小6全体)

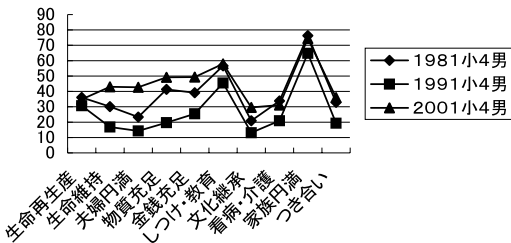


図3 大切な働き(小4男子)

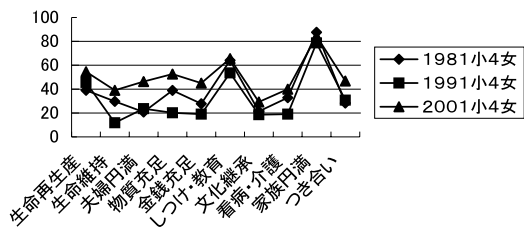


図4 大切な働き(小4女子)

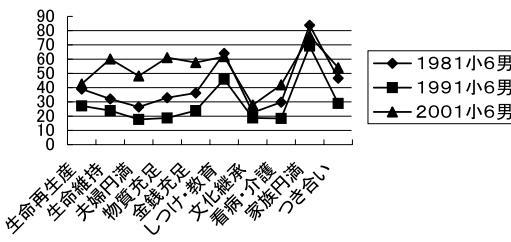


図5 大切な働き(小6男子)

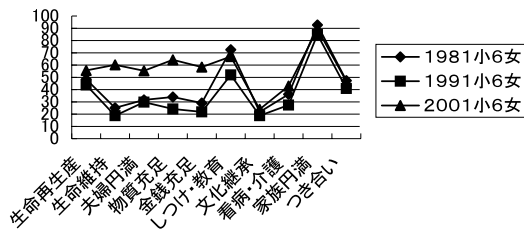


図6 大切な働き(小6女子)

（ ）内の名称はグラフに掲載するために項目を省略したものである。

本稿では「その他」の項目を省略して比較を行った。

【結果・考察】

①全体・発達段階別：最も重要であると考えている機能は小4・小6共に「家族のみんなが楽しく暮らす」「子どもをよい人間に育てる」であり、その順位は変わっていない（図1，図2）。また「子どもを生み育てる」や、「その家の習慣を受け継いでいく」についても変動はみられなかった。その他については、1981年と1991年の調査はほぼ同じ傾向を示すものが多かったが、2001年の調査では、小4が「夫婦が一緒にくらす」、小6では「寝たり休んだりする」「夫婦が一緒にくらす」「くらしに必要なものがある」「くらしに必要なお金がある」を選ぶ回答率が高く、さらに家庭科を学習している小6の方が家庭機能の重要性をより多く認識していることがわかる。

②発達段階・性別：小4の男子では特に「寝たり休んだりする」「夫婦が一緒にくらす」、小4女子では「夫婦が一緒にくらす」「くらしに必要なものがある」「くらしに必要なお金がある」の項目において、2001年の結果が、1981年と1991年の結果を大きく上回っている（図3，図4）。さらに小6では、男女共に「寝たり休んだりする」「夫婦が一緒にくらす」「くらしに必要なものがある」「くらしに必要なお金がある」の項目が1981年と1991年の結果を大きく上回っていた（図5，図6）。また、「老人や病人などが守られる」について、回答率は低いものの、小4男子以外は大切と考えている児童が増えていることがわかる。

（2）子どもが家庭に望むこと

「子ども（きょうだい）がたくさんいる（きよ

うだいの増加）」「ゆっくり寝たり休んだりする（十分な休息）」「両親が仲良くくらす（夫婦円満）」「くらしに必要なものがたくさんある（物質的充足）」「金がたくさんある（金銭充足）」「子どもをよい人間に育てる（しつけ・教育機能）」「家の習慣を大切にする（伝統文化）」「老人や病人などが守られる（看護・介護）」「家族みんなが楽しくくらす（家族円満）」「近所の人や友だちなどがきてくれる（つき合い）」「その他」の項目から複数選択させた。ただし、本稿では「その他」を省略した。

（ ）内の名称はグラフに掲載するために項目を省略したものである。

【結果・考察】

①全体・発達段階別：「家族みんなが楽しくくらす」を最も多く希望していることについては以前と同じである。逆に「ゆっくり寝たり休んだりする」をより望む児童が過去に比べてかなり多く、それは小4よりも小6の児童に顕著に表れている（図7，図8）。また発達段階の違いとして、小4では「子ども（きょうだい）がたくさんいる」ことをより望む者が多いのに対し、小6ではきょうだいが増える代わりに「近所の人や友だちなどがきてくれる」ことを求めている。全体的には「両親が仲良くくらす」「くらしに必要なものがたくさんある」「お金がたくさんある」など、日々の生活の充足に力点が置かれており、「子どもをよい人間に育てる」「家の習慣を大切にする」「老人や病人などが守られる」は、あまり必要だと認識されていない。

②発達段階・性別：小4の女子では「近所の人や友だちなどがきてくれる」ことをより望む者が過去2回の調査に比べてかなり増えた（図9，図10）。また小6の男子では「ゆっくり寝たり休んだりする」を望む割合が最も多かった（図11，図12）。

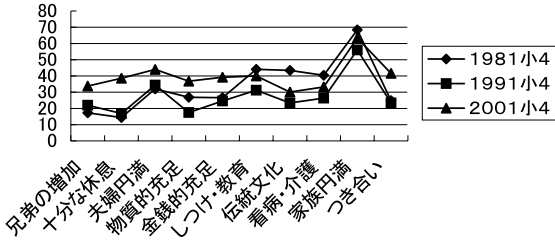


図7 より望む働き(小4全体)

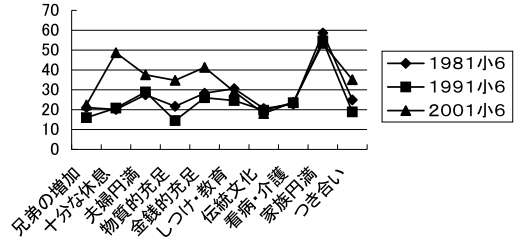


図8 より望む働き(小6全体)

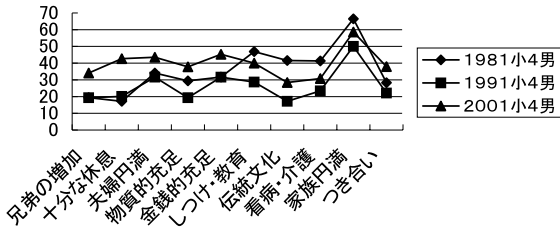


図9 より望む働き(小4男子)

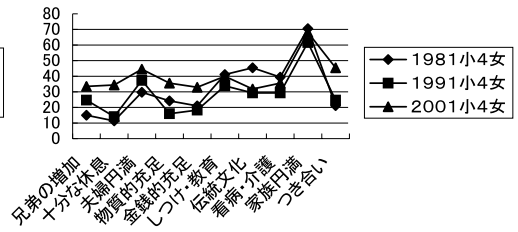


図10 より望む働き(小4女子)

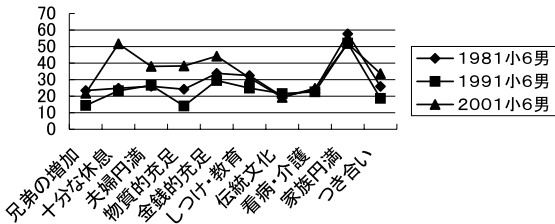


図11 より望む働き(小6男子)

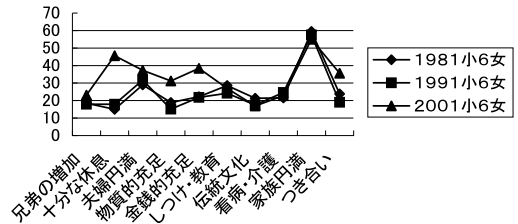


図12 より望む働き(小6女子)

4. 学習指導要領と教科書から見た 家庭科教育

「家庭科は家庭生活を運営していくために必要な被服・食物・住居・保育・家族関係・家庭経済および家庭管理などに関する知識・技能、態度を習得させ家庭生活をよりよくする能力を養う教科である。」と『現代の子どもたちは家庭生活をどう見ているか』日本家庭科教育学会の序に述べられている。20年前の家庭科のとらえ方であるが、現在はどうなのだろうか。ここでは小学校学習指導要領と教科書を参考に家庭科教育を通して、子どもたちは何を学んでいるのか、子どもの家庭生

活や家族観にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにしたい。

(1) 学習指導要領

子どもの家庭認識の調査年に使用されていた小学校学習指導要領を見ると、1981年は昭和52(1976)年改訂、1991年は平成元(1989)年改訂、2001年は平成10(1998)年に改訂が行われているが、施行は2002年からであるため実質使用されているのは1991年と同様の学習指導要領である。しかし、移行期にあたり学校によっては新学習指導要領に準拠する授業が行なわれており、ここではこの3回の改訂状況について分析を試みる。

①学習指導要領の基本的ねらいの変遷

昭和52（1976）年改訂 ゆとりある充実した学校生活の現実とし、これまでの詰め込み教育に対して子どもの学習負担の適正化を図ることをねらいとした。この背景にはいわゆる落ちこぼれと呼ばれ、学習についていけない子どもたちが問題視されたことによる。

平成元（1989）年改訂 社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成がねらいとなった。校内暴力やいじめが教育現場で大きな問題となり心の教育充実が図られた。

平成10（1998）年改訂 完全学校週5日制の実施により学習内容と授業時間数の削減が行われ、基礎・基本を確実に身につけさせ自ら学び自ら考える力など「生きる力」の育成がねらいとなっている。

社会の変容に対応しながら学習指導要領も改訂されてはいるが、今回改訂の指導内容削減は学力低下を懸念する声も聞かれ、塾の容認や土曜日の授業を認めるなど文部科学省の対応は信頼性に欠けるものとなった。

②小学校家庭科の学習指導要領

平成10（1998）年改訂前の小学校家庭科内容は、3領域区分法が用いられていた。昭和52（1976）年告示では、A被服、B食物、C住居と家族であり、平成元（1989）年告示は、

A被服、B食物、C家族の生活と住居の3区分である。これは中学・高等学校家庭科の領域にあわせた従来の衣・食・住の考え方である。それに対し、平成10（1998）年の改訂はこれまでの領域別編成から生活課題別編成へと変更されている（表2）。これまでになかった展開であり、児童が学習したことを家庭生活に生かすやすく、より生活実態に即した内容の扱いと考えられる。また家庭科の時間数はこれまで5・6年生とも年間70時間であったものが5年生60時間、6年生55時間と小学校全体で25時間の削減となっている。時間数の削減に伴い内容の精選が行われ基礎的・基本的事項に重点がおかれている。

子どもの家庭認識や家族関係についてみると、昭和52（1976）年はC住居と家族の区分に含まれ、住居と家族が並列しているように見えるが、内容は住居の整理整頓、住まい方の付け加えとして家族の立場や役割を理解させるようになっており、扱われ方は僅かである。平成元（1989）年はC家族の生活と住居の区分に含まれる。前回と比べ住居と家族が入れかわり前面にでてきた。目標が「家族の仕事や役割を理解させ・・・」から「家庭における家族の生活を理解し・・・」に変更され、仕事や役割に限定せず広く家族を理解し、家族を重要視しつつあるが、内容はほとんど変わらない。しかし今回の改訂は、「家庭生活は衣食住それぞれの生活が単独で行われているのではなく、また、家族とかわり合いながら営まれている・・・」と解説されているように家庭生活の基礎として家族とのかかわりがあるという扱いになっている。改訂が実施されるごとに家族重視が図られている。少子化、家族危機・崩壊など子どもを取り巻く家族問題が表出化し、国は家庭生活の基礎となる家族の重要性を認め、家庭科の内容編成を見直したと考えられる。

表2 平成元（1989）年と平成10（1998）年の内容

平成元（1989）年まで	平成10（1998）年
A 被服	1 家庭生活と家族
	2 被服への関心
	3 生活に役立つ物の製作
B 食物	4 食事への関心
	5 簡単な調理
C 家族の生活と住居	6 住まい方への関心
	7 物や金銭の使い方と買い物
	8 家庭生活の工夫

表3 小学校5年生教科書の変遷

家庭・家族に関する内容		
1981年 5年生	1991年 5年生	2001年 5年生
家庭科の学習をしましょう	家庭科の学習をしましょう	家庭科の学習を始めよう
1.家庭の仕事とわたしたち	1.家庭の仕事とわたしたち	1.わたしと家族
		わたしと家族の生活を見つめよう 自分にはどんな仕事ができるだろう
2.わたしたちの衣服	2.わたしたちの衣服	2.わたしたちの衣服
衣服の着方 さいほう用具と名前のぬいとり ボタンつけと返しぬい 小物作り	衣服の着方 さいほう用具と名前のぬいとり ボタンつけ 小物作り	衣服の着方を見つめよう さいほう用具を使ってみよう 楽しい小物を作ろう
3.わたしたちの食物	3.わたしたちの食物	3.食べ物のほたらき
からだと食物 野菜サラダ 食物の食べ方	からだと食物 ゆでたまご よい食べ方	なぜ食べるのだろう バランスのよい食べ方をくふうしよう たまごの調理をしよう
4.衣服の清潔	4.衣服の清潔	
下着の着方 下着のせんたく	下着の着方 下着のせんたく	4.わたしのふくろ、ほくのふくろ
5.便利なふくろ	5.便利なふくろ	身の回りにはどんなふくろがあるだろう 自分の生活に役立つふくろを作ってみよう ミシンを使ってみよう
いろいろなふくろ ふくろ作り	いろいろなふくろ ふくろ作り	5.いろいろな野菜の調理
6.かんたんな調理	6.野菜の調理	どんな野菜料理を食べているのだろう 野菜の料理を作ろう
調理と燃料 ゆでたまご 緑黄色野菜の油いため	野菜と健康 野菜サラダ 野菜の油いため	6.清潔な住まい
7.気持ちのよいすまい	7.気持ちのよいすまい	身の回りの整理整頓をしよう すまいを清潔にしよう こみのしまつについて考えよう
すまいのよごれ 持ち物の整理・整頓 そうじ 仕事に役立つもの	すまいのよごれ そうじと整理・整頓 仕事に役立つもの	
8.ミシンぬい	8.ミシンぬい	
ミシンのあつかい方 ぬい方	ミシンのあつかい方 ぬい方	7.楽しいおやつ
9.楽しいおやつ	9.楽しいおやつ	おやつのとり方を考えよう 家族とのひとときを楽しくすごそう おやつを作ろう 飲み物を用意しよう
おやつ おやつを用意 家族のだんらん	おやつ おやつを用意 家族のだんらん	8.5.家庭科の学習を終えて

表4 小学校6年生教科書の変遷

家庭・家族に関する内容		
1981年 6年生	1991年 6年生	2001年 6年生
1.生活時間のくふう	1.わたしたちの家庭生活	1.よりよい家庭生活をめざして
	家庭のはたらき わたしたちの生活時間	家庭生活をふり返ってみよう わたしたちの生活時間を見つめよう 家庭生活への協力について考えよう
2.エプロンやカバーの製作	2.エプロンやカバーの製作	2.生活に役立つエプロンやカバー
いろいろなエプロンやカバー エプロンやカバー作り かんたんなしゅう	いろいろなエプロンやカバー エプロンやカバー作り かんたんなしゅう	身の回りにはどんなエプロンやカバーがあるだろう 世界にひとつのエプロンやカバーを作ろう
3.毎日の食事	3.食物と調理	3.調理のくふう
食事のとり方 ごはんのみそしる こんだてのくふう	調理のいろいろ たまごじやがいの調理 調理のくふう	どんな調理があるだろう じゃがいも料理を作ろう 魚や肉の加工品を使った料理を作ろう
4.日常気の着方	4.日常気の着方	4.夏のくらし
着方のくふう ほころびなおし 上着のせんたく 衣服の選び方	着方のくふうと選び方 上着のせんたく ほころびなおし 衣服の選び方	夏を気持ちよくすごそう すずしい着方をくふうしよう 衣服の手入れをしよう 洗たくをしよう
5.食物と調理	5.毎日の食事	5.わたしたちの食生活
調理のいろいろ たまごじやがいの調理のくふう	食事のとり方 ごはんのみそしる よい食事	食事のとり方を見直そう ごはんのみそしるについて調べよう ごはんのみそしるを作ろう バランスのよい食事を考えよう 楽しい食事をくふうしよう
6.わたしたちのすまい	6.わたしたちのすまい	6.くらしと買い物
季節にあったすまい方 明るいすまい すまいと家庭生活	季節にあったすまい方 明るいすまい すまいと家庭生活	お金をどのように使っているか調べよう 買い物のしかたを考えよう 商品の選び方を考えよう 買い物とくらしを考えよう
7.楽しい会食	7.楽しい会食	7.冬のくらし
生活と会食 サンドイッチと飲み物 会食のしかた	生活と会食 サンドイッチと飲み物 会食のしかた	冬を気持ちよくすごそう あたたかく明るい住まい方をくふうしよう あたたかい着方をくふうしよう
8.これからの家庭生活	8.これからの家庭生活	8.楽しい会食
わたしたちの家庭生活 家庭生活と社会	わたしたちと家族 家庭生活と社会	どんなときに会食するのだろう 会食の計画を立てよう サンドイッチを作ろう 飲み物を用意しよう 楽しい会食をしよう
		9.これからの家庭生活
		家族と協力して生活しよう 地域のつながりを大切にしよう 住みよい地域の環境を考えよう

（2）教科書（東京書籍『新しい家庭5』『新しい家庭6』）

学習指導要領に基づき編集された家庭科の教科書では具体的にどのような内容になっているのだろうか。1981年，1991年，2001年に使用されている教科書の目次をまとめると表3，表4になる。ここでは家庭生活や家族に限定し考察する。全体の流れから見れば，5・6年生ともに1981年と1991年は内容の項目間の移動や僅かな違いはあるが大きな変更はない。学習指導要領と同様である。2001年の内容は家族重視の傾向が教科書に反映されている。

5年生では，これまで「1 家庭の仕事とわたしたち」の項目が「1 わたしと家族」に変わり，児童自身が家族の一員としての自覚を持ち，家族を理解し協力し合うことの大切さを強調している。そして「楽しいおやつ」の章に「家族のだんらん」という項目があるが，1991年までは，家族のために美味しいお茶の入れ方が中心であったが，2001年には「家族とのひとときを楽しくすごそう」に変更され家族共通の楽しい時間や会話の時間を作ることを加えている。

6年生では，1981年「1 生活時間のくふう」が1991年「1 わたしたちの家庭生活」，2001年「1 よりよい家庭生活をめざして」と変わり，「父」を主体（家族の中心ととらえている）とする生活時間のみであったものが，「わたし」が主体に変わり家庭の働きも加わった。さらに2001年には，家族で一緒に過ごす時間を強調し，家庭の機能（話し合う，相談する，食事，睡眠，心や身体の疲れをとる，安心して生活する，協力・工夫する）が，具体的に明確化された。家族が変化していることをあげふれ合う工夫をすることが大切であることも述べている。「家庭生活への協力について考えよう」地域へのつながりを大切にしよう

「住みよい地域の環境を考えよう」の項目が加わり，地域とのつながりや環境を考えさせ思いやりの心を育てる内容も示されている。また「6.くらしと買い物」が新たに加わり消費者教育が実施されるようになった。

20年間の家庭科教育の流れを見ると，社会や家族の変化に対応し家庭科では家族重視の考え方が強くなる傾向が見られる。これまで家庭内でしつけ教育としてあるいは体験として学んできたことが，学校教育で教えなければならなくなってきたともいえる。

5.まとめ

子どもの調査結果から，年齢が上がるにつれて，休息や時間的ゆとりを求める児童が多く，子ども自身が身体的・心理的開放を強く望んでいることが特徴として挙げられる。また，性別，発達段階に関わらず，子どもは家族が楽しく暮らすことを望む一方で，物質的充足をより望む傾向が強い。つまり，家庭を生命の再生産と消費の場としてとらえており，このことから家族関係の希薄さがうかがえる。

家庭科教育の内容と照らし合わせてみると，家庭科では家族と楽しく過ごすことを強調し，みんなで過ごせる時間を工夫によって作り出す教育が行われてきた。それを子どもが望むのは当然のことである。しかし発達段階に関係がないことを見ると教育効果とはいえないであろう。また現代の家族状況を考えると楽しく過ごすことを求められない家族の存在も見過ごせない。その反動とはいえないがモノで即時的満足を得ようとする子どもも少なくないことが伺える。

学校教育は1977年からゆとり教育として学習内容，授業時間ともに減少させてきた。にもかかわらず，子どもは疲れを感じ休息や時間的ゆとりを求めるのはなぜだろうか。20年

前の子どもと比べ学校教育はずっと楽になっているはずである。これは子どもの生活様式の変化、つまり遊び方や習い事、塾、親の生活時間などあらゆる社会や家庭環境の変化から考えなければならない問題であろう。

これらの状況を踏まえ、小学校家庭科においては積極的に人としての生き方・あり方を教えていく体験学習が必要であると考え。児童が生活に必要な基礎的な知識と技能を単に身につけるのではなく、今後は人との関わりから得た感動や発見などが生まれる、生きた教材がより必要であると考え、それらを加えたカリキュラムの作成が今後の課題である。

参考文献

- 1) 日本家庭科教育学会『現代の子どもたちは家庭生活をどうみているか』1984 家政教育社
- 2) 林雅子他『新しい家庭5』1980 東京書籍
- 3) 林雅子他『新しい家庭6』1980 東京書籍
- 4) 林雅子他『新訂新しい家庭5』1989 東京書籍
- 5) 林雅子他『新訂新しい家庭6』1989 東京書籍
- 6) 渋川祥子他『新編新しい家庭5』2000 東京書籍
- 7) 渋川祥子他『新編新しい家庭6』2000 東京書籍
- 8) 文部省『小学校学習指導要領』昭和52年
- 9) 文部省『小学校学習指導要領』平成元年
- 10) 文部省『小学校学習指導要領』平成10年
- 11) 道村昌代「家庭生活・性役割についての研究 神通川流域における小学校4・6年生を中心に」1992卒業論文
- 12) 日本家庭科教育学会「児童・生徒の家庭生活の意識・実態と家庭科カリキュラムの構築 家庭生活についての全国調査の結果」2002(株)ワールドプランニング